

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	神奈川県	市町村名	川崎市	大 学 名	
派遣日	令和 6 年 10 月 28 日 (月曜日) 14:00~17:00 ※派遣当日の日程を詳細に記入してください。 【日程】 14:00 打ち合わせ 14:10 開場・オンライン入室開始 14:30 開会・挨拶・講師紹介 14:40 講義開始 「外国につながる子どものすべてのことばの力に光をあてよう」 16:15 振り返り・事務連絡 16:30 閉会 ※派遣当日の次第、研修実施要項・日程表等、日程の詳細が分かる資料を添付してください。				
実施方法	※いずれかに○をつけてください。派遣 / 遠隔				
派遣場所	川崎市教育文化会館 〒210-0011 神奈川県川崎市川崎区富士見2-1-3				
アドバイザー氏名	櫻井 千穂 先生				
相談者	川崎市教育委員会事務局 教育政策室 人権・多文化共生教育担当				
相談内容	日本語指導が必要な児童生徒への支援体制は整ってきているが、外国につながるのある児童生徒を指導した経験が浅い教員が多く、児童生徒理解や指導力の向上が課題となっている。 そこで、外国につながるのある児童生徒理解と指導力の向上を目指し、発達段階における児童生徒の総合的な「ことばの力」についての理解を深められるような研修を行いたいと考えた。日本語指導担当者を主な対象とした研修会において、在籍学級担任等を含む外国につながるのある児童生徒に関わる幅広い教職員のオンラインでの研修参加を可能とし、川崎市の各学校における支援をより充実させていきたい。				
派遣者からの指導助言内容	1 外国につながる子どもの教育の基本 ⇒「外国につながるのある子ども」は「日本語も○○語もできる可能性のある子ども」だといえる 【子どものことばの力の発達について】 ・ひとつめのことばは「聞く→話す→読む→書く」の順で育つ。 ・聞く・話す力は自然習得であり、豊かな体験が必要。 ・覚えるだけのプリント学習は効果が限定的である。文字をただ書き写しているだけかもしれない。 ・母語で読み書きがしっかりできれば、日本語の読み書きの学習も進む。 ・概念や知識、考える力を育てる必要がある。				

※本当に子どもだけの問題で困難さがあるのか、教員のかかわりや支援方法について立ち止まって考えることが欠かせない。次の①②のような間違った認識をもっていないかを確認することが大切である。

【間違った認識】

①来日間もない時期に・・・

- ・日本のルールを身につけさせないといけない。
- ・日本語ができないから、日本語で話しかけても無駄。
- ・授業参加は到底できない。
- ・ひらがな、カタカナ、漢字を 100 回書くのがいい。

②長く日本にいるのに・・・

- ・ペラペラしゃべるけど、勉強ができない。
- ・やる気がない。生活態度がよくない。
- ・家は母語で日本語が伸びないから「家で日本語を話して」と言う。
- ・日本語も母語も全くわかっていない子だ

2 日本語指導が必要な子どもは、「日本語ができない子」ではなく、「日本語も〇〇語もできる可能性のある子ども」である

【事例：環境問題のイラストを見て話す子ども（9歳）の会話（録音）より】

日本語：語彙は少なく、正しい文章を話すことはできていないが、環境汚染の概念や、その対策について、今もっている日本語で伝えようとしている。

母 語：環境汚染について、理由や対策をあげながら、詳しく説明することができている。

この事例から、日本語の会話に流暢さがなく、文法の間違いがあっても、子どもが自分のことばで環境汚染について伝えようとしていること、その思考力を教員が読み取ることが大切である。母語の様子からも「考える力がある子」であることがわかる。

⇒表面的な日本語の力だけでなく、子どものすべてのことばの力を活かす「トランスランゲージング教育」を行う。

3 見取りから支援へつなげる【ワーク】

二人の子どものDLA実施動画を視聴した後、数人で話し合いながら評価を行うとともに、「どのような支援があると何ができるか」について話し合った。

① Aさん（滞日期間の長い低学年）のケース

② Bさん（来日直後の中学生）のケース

4 Aさん、Bさんの支援例

【支援の3つの視点】

取り出し授業・在籍学級でのユニバーサルデザイン授業・読み書きの強化

① Aさんの支援例

○取り出し授業では、在籍学級との連携と母語の保障を目指す

- ・リライトを使った先行学習をする
- ・母語でのタスク型授業（週1回程度）を実施

○在籍学級ではユニバーサルデザイン授業を実施することで、クラスの児童全員にとってわかりやすい授業が実現する

- ・発話調整（ゆっくり、はっきり、短く）を行う

	・視覚支援を行う ・レベルにあったリライト教材を活用する ○<u>読み書きの強化をすることで、読み書きの世界に入ることができる</u> ・絵本レベルからの多読を行う ・あらすじ書きを実施 ・音読をする ・対話日記を行う ② Bさんの支援例 ○<u>取り出し授業では在籍学級との強固な連携を目指す</u> ・母語→やさしい日本語での先行授業を実施 ○<u>在籍学級ではユニバーサルデザイン授業を実施することで、自然習得が進む教室環境（友達関係づくり）</u> ・プリント教材の工夫 やさしい日本語、母語で要点を先に伝える ・入り込み指導を実施 ・母語で考えを表出できる場を作る ○<u>読み書きの強化をすることで、世界を広げる。</u> ・二言語多読を行う ・テーマ作文を行う 5 子どもがもっているすべての力を ささえて 伸ばしましょう
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	当日は、日本語指導担当者は対面研修とし、オンラインで学校関係者が参加できるようにした。管理職や在籍学級担任、支援教育コーディネーター、教科担当者等様々な立場で研鑽を積む機会とすることができた。 振り返りアンケートでは、「動画を見て、生徒の会話している様子を周りの先生と相談しながら、評価していく時間が有意義だった。」「動画でDLA実施の様子を見て、教師の支援がいかに大事かを実感できた。」「知識・概念、考える力を育てる意識をもつということから、日本語だけでなく、子どもの母語の力を包括的にみることの重要性を理解できた。」といった回答があった。このような回答から、研修参加者が外国につながるの児童生徒の理解を深めるとともに、発達段階における児童生徒のことばの力について学ぶことができたのではないかと感じている。 今後も「外国につながるの子どもがもっているすべての力を支えて伸ばす」ことができるように、外国につながるの児童生徒について、日本語指導担当者とともに、全ての教職員を対象にした研修や情報提供を行い、支援や指導の充実を目指していきたい。

1枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。